

アジア経済史2

2. 近世から近代へ - 地域間経済関係の変容

2020.12.10

Contents

1 開港	2
1.1 カントン・システム	2
1.2 東インド会社	2
1.3 銀の流出	3
1.4 貿易制度の改正と洋関の創設	3

18c 末から 19c 始めにかけて、世界貿易は量的、質的 (香辛料、銀のよう
なそれ自体の価値が高い商品だけでなく日用品や、米、小麦などのかさが大
きく単価が低いものも取引されるようになった) に大きな変化があった。単に
世界貿易の構造が変わっただけでなく、貿易制度も大きく変わった。中国、イ
ンドも世界経済の変容に参加していく。

世界貿易の変化は、自由貿易原則と交通革命 (蒸気船や鉄道、自動車といった
大量輸送が可能になる技術的な変化) によって起きた。制度と技術が絡まり
合って質的、量的な拡大が可能になったのである。

こうした変化を牽引したのはイギリスであった。イギリスは、自分の国で機
械で安く作れるようになった製品を売るために貿易障壁 (関税) をなくして世
界的に貿易がしやすい制度を張り巡らせようとし、アジア、インドで貿易障
壁の撤廃に動いていく。従来の考え方ではイギリスでは地方の産業資本家が
自国の商品を守るために世界的な自由貿易を推進したと言われていたが、自
由貿易原則を推進したのはむしろ資金移動の活性化 (ロンドンシティの金融資
本家が担い手) であった (ジェントルマン資本主義)。

強制された自由貿易という印象的な言い方をしたのは杉原薫先生だ。アジア
諸国は自由貿易制度 (条約で決められた関税、取引のあり方のこと) をイギリ
スの意図に沿う形で変えなければいけなかった。これはアジア側の意図にそ
う物ではなく、西洋列強が強制したものだった。しかし、制度的変化、交通
技術、通信技術の革新によって貿易機会が拡大したことはアジア商人にも利
益をもたらした。制度変化、技術革新が各地でどのような変化をもたらした

のか、ということは強制された、という側面に止まらず各地で検証が必要である。

以下では中国はどのように自由貿易原則に巻き込まれたかを見る。中国はアヘン戦争での敗北をきっかけに朝貢とは全く違うシステムに取り込まれ。(屈辱の歴史か、それまで停滞していた中国経済が近代化し始めた大国の覚醒論か)。

必ずしもアヘン戦争前の中国経済は閉じていたわけではないことに注意。清朝以降の貿易のあり方(互市)というシステムのもと貿易の管理(地点をいくつかに制限)はしていたもののそれは商人の自由な取引を前提としていた。朝貢システム下での厳格な管理を追求する清朝が自由貿易を標榜する西洋と対立した、という見方は正しくない。また自由貿易の反対として保護関税が想定されているとするならば、中国には保護関税という考え方自体が存在していなかった。

第二部では、どうして清朝はイギリスとアヘン戦争を戦うことになったのか。どのように影響を与えたのか見ていく。

1 開港

1.1 カントン・システム

清朝が民間貿易統制の方法を互市という。このうち広州には欧米の商人の来航が許されていた。従来の研究では欧米との貿易に注目が集まっていた(カントンシステム)が、カントンシステムの実態は他の港でのあり方と同様に特権商人(外洋行。西洋船との交易ライセンスと引き換えに徴税を請負)を通じて外国商人から徴税を行う、というものだった。

1.2 東インド会社

カントン・システムに欧米側はどのように対応したか。イギリスによるカントン貿易は、国内の中国茶への需要拡大を背景に顕著な拡大傾向にあった。一方でイギリスは中国が欲しいものを作ってなかったので銀が流出した。これを解決したのがアヘンだった。しかしアヘンは中国で禁制だったため、東インド会社自身が公的に売り込むことはできず、民間商人(カントリートレーダー)がアヘンを輸出した(お茶を買うのは東インド会社、アヘンを売るのは民間商人)。この二者は手形によって結びついていた。(なんかごちゃごちゃ言ってたけど全く意味わからなかった。インドは中国から欲しい商品がなかったため、茶貿易とは対照的にアヘン取引は中国側の入超だった。この貿易構造の違いと地方貿易商人の需要を捉えて東インド会社が手形をうんちゃらした。会社の手形を介してカントリートレーダーのアヘン取引と東インド会社の茶貿易

が結びついたらしい。送金問題って pdf に書いてあるけどなんじゃそりゃ) カントリートレーダーのアヘン貿易は 19c 始めに大きく伸びると、東インド会社が発行する手形がむしろ足りないということになって、アメリカも巻き込んだ二つの三角貿易 (アメリカも中国茶を買っていた。カントンで中国茶を買うときに銀そのものではなくロンドン宛の手形を持ち込むようになった。) によってアヘン貿易が支えられることになった。19c のアヘン貿易量増加は、金融上の手段が拡大したことと対応しているのである。

1.3 銀の流出

こうした中で銀が中国から流出し始めた。中国側で不法にアヘンを購入する零丁洋、官僚にお金を払って密輸する黙許が横行したことで、広州以外のイリーガルな貿易増えた。このインド製アヘンの大幅な輸入増加に加えて、生糸や茶と言った輸出産品の不調、世界的な銀供給の減少も相まって中国から銀が流出した。これによって国内の銀価格が上がると銀銅比価 (銀の銅銭による交換レート) が大きく銀高になる。日常の労働者の賃金は銅だったのに対し税は銀納だったため、農民は圧迫され、社会不安が広まった。銀の移動を制御しきれなかった清朝は、アヘンの輸入停止を試みてイギリスと対立し、アヘン戦争で敗れた。南京条約では請負商人の外洋行の独占廃止、関税率の制定がなされた。

1.4 貿易制度の改正と洋関の創設

従来、中国は西洋に対して広州しか開いておらず、特定の商人を通すことが義務付けられていた。イギリスはこれを不満に思っており (請負商人たちがこれは税、と言って取る分がどれだけ外洋行の懐に入るのか、と思っていた。)、貿易障壁である、としてこれを廃止した。しかし、

外国商人は中国の慣習、言葉を理解しないので手引きをしてくれるカウンターパートが必要だった。そのため外国商人側のエージェントとして買弁を雇った。彼らは外洋行とは違い外国商人側なので徴税は行わない。中国は徴税のチャンネルが空白になってしまった。加えて大規模な汚職や収賄が行われ貿易が無秩序化した。これは欧米諸国にとっても憂慮すべきことで (せっかく独占商人を廃止したのに自国人も含めた無秩序な取引が横行していた。さらに 1853 年の太平天国の南京占領で、上海での貿易が混乱。)、制度自体が崩れかねなかった。こうした事態を改善するため外国人税務司を導入した。会館で税を取り仕切る税務士制度によって課税額と徴税額が把握され、多額の税收確保でき、他の開港場でも安定した取引の場が広がっていった。

自由貿易 (条約で国と国との間の取り決めで支えられる。「国家」である) によって開かれた港は互市や朝貢 (中華思想、儀礼といったアイデアに支えら

れて) とは考え方、規則のあり方が違う。条約体制に組み込まれることによって清朝は新たなルールを受け入れることになった。